

ニッポンとブルーノ・タウト

ブルーノ・タウトは、偉大な建築家であり都市計画家で、建築の理論家であり、空想的社会改革派である。ドイツでは、ブリッツの馬蹄形住宅を代表とする住宅団地、ジードルングを作った最も重要な建築家のひとりとして、また「アルプス建築」や表現主義を追求した「ガラスの嶺」の活動によって、ユートピア思想の頂点に立つ建築家として知られている。一方、日本で工芸の指導に携わったことなどは長らく知られておらず、日本とトルコにおける仕事が明らかになったのは、1980年にベルリンで開催されたタウト生誕100年記念の展覧会が初めてだった。

私は留学生として、1966年から75年までの10年間、日本に滞在していた。早稲田大学の吉阪隆正研究室に籍を置き、73年に博士の学位を取得した。当時の私は建築史を学びながら、現代の日本とお祭りなどに代表される日本の文化、とりわけお遍路さんに強い関心を抱いており、タウトの作品について調べることはなかった。

1982年デュッセルドルフで日本の近代建築についての展覧会が開催された。その構想を私が練ることとなり、導入部として日本の仕事が明らかにされつつあったタウトの作品を紹介しようと考えた。その準備のために日本に行き、タウトの著作の大多数を翻訳した篠田英雄さんを訪ね、岩波書店で保管されていた自筆の書物の山を見ることができた。それは、驚くべきものであった。著作から伝

わるその人柄と行動に惹かれたことが、私がアーヘン工科大学にてタウトの研究を始めたきっかけである。

数年後、高崎の水原徳言さんを訪ねた。その際、多種多様な日用品と、デッサン、設計に関する資料の山を見せてくれた。それらも驚くべき内容だった。水原さんは1992年に群馬県立歴史博物館でタウトの美術工芸に関する大規模な展示会を監修していた。これに勇気づけられた私は、94年、東京のセゾン美術館で開催された回顧展「ブルーノ・タウト 1880-1938」を監修した。この時ようやく、タウトの膨大で多方面にわたる活動を包括的に紹介することができたのである。この企画にあわせて調査を重ねるなかで、タウトが独立する前の仕事や、生駒山計画についての詳細などが明らかになった。

近年、タウト再評価の気運は高まっており、ベルリンで設計した4つのジードルングは、ユネスコの世界文化遺産に登録された。これはベルリンの建築家、ヘルゲ・ブリッツ (Helge Pritz) さんとウィーンフルード・ブレンネ (Winfried Brenne) さんが色彩の復元と保存に尽力したお陰であり、タウトを研究するひとりとして心から感謝したいと思う。

日本で書かれた著作物を私がドイツで初めて出版したのは1997年で、日本で出版されてから、実に60年後のことであった。これまでにタウトの本は6冊刊行してきたが、2013年、新たにタウトの「日記 1933」をドイツで出版す

る運びとなった。それ以降の日記も、順次刊行していく予定である。

タウトが住んだ洗心亭の石碑には「ICH LIEBE DIE JAPANISCHE KULTUR」「我、日本文化を愛す」と刻まれている。愛しているからこそ、厳しく批判できるのである。そして「NATUR UND KUNST SEI EINES NUR」「自然と美術はひとつに調和したものであるべき」というタウトの言葉もある。相反するふたつのものの調和に、タウトの哲学の真髓がある。



シニバイデルが企画し、発行したタウトの「日記 1933」。



タウトの墨絵「富士・嵐」。静謐な美しき富士山を愛でつつ、一方で火山の荒々しさをタウトは捉えていた。所蔵：岩波書店